

## ウェールズの風景—R.S. トマス、詩の翻訳とコメント—

佐 野 博 美

Welsh Landscape — Japanese Translations of Poems by R.S. Thomas ; ‘Song for Gwydion’, ‘Song’, ‘Welsh Landscape’, ‘Pisces’ and ‘Evans’

Hiromi Sano

詩人は存在の原点を探し求める。空の彼方に。地の底に。宗教のおしえるところに耳を傾け、哲学書をあさり、神の姿をかいま見ようとする。この熱望はしばしば長い間かなえられない。R.S.トマスも祖先の地、ウェールズに神秘的なあこがれを抱き、その山岳地帯の美しい自然にロマンティックな夢を持つ。まるでそこがお話のなつかしい国、いつか帰るべき夢の原点であるかのように。

During my return by train from theological college to Caergybi I used to pass through the Welsh border country. Since it was an evening train, I used to see the Welsh hills outlined darkly against the afterglow in the west. My imagination was stirred, and I thought of lonely farms and dark-faced people, and a past of strife and bloodshed. (R.S. Thomas, “Autobiographical Essay”, p.9.)

〔神学大学からカージビーへと列車で帰る時、私はいつもウェールズの辺境地帯を通過した。遅い時刻の列車であったので、ウェールズの山並みが、燃え残る西空を背景に黒く浮かんで見えたものだ。私の想像力はかき立てられて、もの寂しい農場や、謎めいた翳りに生きる住人たちや、戦いと流血の過去を思い描いた。〕

しかし牧師としてこの地に着任し、子供時代からの夢がかなえられてしまうと、彼は彼自身の夢想と現実の間のギャップにただ戸惑う。そこにも他の世界と変わらぬ常の生活があり、しかも自然環境は驚くほど過酷である。遠目には美しい夢の国も、現代社会の害悪に毒されて、時には見捨てられ、時には観光化されて、産業利益や経済システムの犠牲となり果てようとしている。

### **Song for Gwydion**

When I was a child and the soft flesh was forming  
Quietly as snow on the bare boughs of bone,  
My father brought me trout from the green river  
From whose chill lips the water song had flown.

Dull grew their eyes, the beautiful, blithe garland  
Of stipples faded, as light shocked the brain ;  
They were the first sweet sacrifice I tasted,  
A young god, ignorant of the blood's stain.

## 息子に

ぼくが幼く、やわらかな肉が静かに  
 降る雪のように、裸の骨の枝々で形になろうという頃  
 父はぼくのため、緑の河から鱒を捕えて帰った  
 ひんやりとしたその唇は雄弁に、水の歌を歌ったものを  
  
 日の光のショックに、鱒たちは眼も空ろ  
 見事に息づく斑紋の花綱も色褪せてしまった  
 ぼくの食した甘いいのちの最初の犠牲（いけにえ）  
 神様はまだ幼くて、血の汚れなどご存知もない

☆1945年、長子 Gwydion 誕生。

R.S.トマスの父親は川釣りを好んだ。トマスが成長した後はピクニックを兼ねて、家族そろって鱒釣りに同行したようである。それ故か、トマスの誕生の記憶の原点には鱒のイメージがある。ちょうど望遠鏡を逆さまに見るように、彼の成長の遙か昔に、川の長（おさ）たる鱒の神々しい姿が、まるで彼の存在理由を説明するかのように浮かんで見える。

I bring the heart  
 Not the mind to the interpretation  
 Of their (=the trout's) music, letting the stream  
 Comb me, feeling it fresh  
 In my veins, revisiting the sources  
 That are as near now  
 As on the morning I set out from them.  
 ("The River", ll. 9-15.)

その（＝鱒の）歌の秘密を  
 今、頭ではなく心で解こう  
 流れる水に身を梳かせ  
 無心にこの血でとらえ  
 旅立った日の あ朝ほどにも近づいた  
 僕の原点に今は還って

### Song

Wandering, wandering, hoping to find  
The ring of mushrooms with the wet rind,  
Cold to the touch, but bright with dew,  
A green asylum from time's range.

And finding instead the harsh ways  
Of the ruinous wind and the clawed rain ;  
The storm's hysteria in the bush ;  
The wild creatures and their pain.

うた

歩いて歩いて、探しもとめる

ぬれた表皮のキノコの輪舞

指に冷たく、露にかがやく

時間の外の緑の聖域

そして見つけた、無情にすさぶ

破壊の風と篠突く雨\*

茂みを駆け抜ける疾風のヒステリー

野に生きる者たちのおののく姿

\*篠突く雨＝原詩は「(かぎ) 爪を持った雨 (the clawed rain)」。鋭い爪で引っ掻く、あるいは突き刺すような激しい雨を指すと思われる。

**Welsh Landscape**

To live in Wales is to be conscious  
At dusk of the spilled blood  
That went to the making of the wild sky,  
Dyeing the immaculate rivers  
In all their courses.  
It is to be aware,  
Above the noisy tractor  
And hum of the machine  
Of strife in the strung woods,  
Vibrant with sped arrows.  
You cannot live in the present,  
At least not in Wales.  
There is the language for instance,  
The soft consonants  
Strange to the ear.  
There are cries in the dark at night  
As owls answer the moon,  
And thick ambush of shadows,  
Hushed at the fields' corners.  
There is no present in Wales,  
And no future ;  
There is only the past,  
Brittle with relics,  
Wind-bitten towers and castles  
With sham ghost ;  
Mouldering quarries and mines ;  
And an impotent people,  
Sick with inbreeding,  
Worrying the carcase of an old song.

### ウェールズの風景

ウェールズに生きるとは  
日暮れ時、流された血に生きること  
血はかって純潔の水面を染めつつ  
川という川を流れて  
この暗く燃える空を作った  
ウェールズに生きるとは  
喧しいトラクターや  
ぶんぶん唸る機械にもまして  
飛び来る矢の数に身構え  
胴震いする森の闘いを知ること  
とにかくウェールズに  
現在（いま）はない  
例えば、その言語（ことば）  
耳柔らかな  
不思議な子音  
例えば、月に応える梟の  
夜の闇に叫ぶ声  
野の隅では声をひそめて  
黒々と待ち伏せている影たち  
ウェールズに現在（いま）はない  
また未来の時も  
壊れそうな遺跡を抱いて  
過去だけがある  
まがい物の亡霊が棲む  
風蝕された塔や城  
崩れた石切り場や鉱山の跡  
そして力も失せた人々は  
近親の交わりに病み  
古の歌の形骸（むくろ）を愛しむばかり

**Pisces**

Who said to the trout,  
You shall die on Good Friday  
To be food for a man  
And his pretty lady?

It was I, said God,  
Who formed the roses  
In the delicate flesh  
And the tooth that bruises.



## 双魚宮

鱒に告げたるは誰そ

汝、聖金曜日に死すべしと

男と愛しきその妻の

糧となりて

我なりきと、神答えたり

優美なる身の

薔薇を創り

また凶暴なる齒を創りたる者

☆神の創造の二面性（鱒とそれを食する者、優美な薔薇と凶暴な齒）に言及している。金曜日は精進日で、肉の代わりに魚を食べる習慣があるというが、聖金曜日（Good Friday）—キリスト受難の日に食べられる鱒（trout）は、聖餐（式）のパンと葡萄酒のイメージであり、キリストの聖なる化身でもあろう。一見残酷な食する行為は、食される者の犠牲のもとに、罪ある人間が神なる者との一体化を許される神聖な儀式でもある。しかしそれとは別に、この世の悲惨な現実、戦争や飢餓や自然破壊の一方的被害者の存在する現実、この不公平に対して、詩人トマスはわりきれない思いを抱いていると思われる。

**Evans**

Evans? Yes, many a time  
I came down his bare flight  
Of stairs into the gaunt kitchen  
With its wood fire, where crickets sang  
Accompaniment to the black kettle's  
Whine, and so into the cold  
Dark to smother in the thick tide  
Of night that drifted about the walls  
Of his stark farm on the hill ridge.

It was not the dark filling my eyes  
And mouth appalled me ; not even the drip  
Of rain like blood from the one tree  
Weather-tortured. It was the dark  
Silting the veins of that sick man  
I left stranded upon the vast  
And lonely shore of his bleak bed.

## エヴァンズ

エヴァンズ？ そう、私は幾度も  
 その家の寒々とした階段を下り  
 がらんとした台所のドアをくぐった  
 そこには薪が燃え、コオロギが  
 黒い鉄瓶の笛に合せて歌っていた  
 そのあとはまた真夜中の  
 息も詰まる冷たい闇の中へと  
 丘の背の索漠たる百姓家の  
 壁を取りまき漂う闇へと

戦慄したのは、この眼や耳を塞ぐ  
 深い闇でもなく、風雨にねじれた  
 ひとつの木から血のようにしたたる  
 雨滴でさえもなかった 真実は  
 侘しい病床の空漠たる岸边に  
 私が置き去りにした男の  
 血管に塗り込められた泥の闇

☆聖職者トマスにとって、ウェールズの教区の現実には厳しい。

山岳地帯の人々は勤勉ではあるが、教育の機会に恵まれず、無知故に偏狭で、都会育ちの若い牧師をとまどわせる。

この詩におけるエヴァンズなる人物は、トマスの “A Peasant” 等一連の詩に登場するイアーゴ・プリザーハ (Iago Prytherch、トマスが創造した、ウェールズの山岳地帯に暮らす典型的農民像) と同様の精神構造を持つと思われる。

And then at night see him fixed in his chair  
 Motionless, except when he leans to gob in the fire.  
 There is something frightening in the vacancy of his  
 mind. (“A Peasant”, ll. 11-13.)

夜は、椅子に腰を据えて身じろぎもせず  
 時折身を屈めては、炉の中に唾を吐くばかり  
 その精神の空虚さに、私は思わずぎよっとなる

## 〔使用したテキスト〕

- (1) R.S.Thomas, *Poems of R.S.Thomas*, The University of Arkansas Press (Fayettevill), 1985.
- (2) William V. Davis (ed.), *Miraculous Simplicity*, The University of Arkansas Press (Fayettevill), 1993.